栗原勇蔵

豪傑の半生

Shin-ichiro Kaneko

36歳にしてプロ生活18年。見るからに不良、やってきたこともおそらく不良。ピッチ上でもたびたび流血し流血させてきた。しかし横浜F・マリノスへの想いがブレることはなかった。やんちゃなティーンエージャーが、誰もが慕う兄貴になるまで。2019シーズン限りでの引退を決断した豪傑の半生に迫った。

インタビュー・文＝安田勇斗　Interview and text by Isato Yasuda
写真＝兼子慎一郎、Jリーグ、横浜F・マリノス　Photo by Shin-ichiro Kaneko, J.LEAGUE, 1992 Y.MARINOS

Yuzo KURIHARA

圧倒的なフィジカルで相手FWとの〝タイマン〟を制し、豪快なヘッドでゴールをこじ開ける。

横浜F・マリノスの最終ラインに立ちふさがった背番号4は強烈な存在感を放ってきた。クラブの育成組織出身で公式戦出場は400試合以上、これまで個人タイトルには恵まれなかったが、その能力の高さから日本代表でも20キャップを刻んだ。

しかし、所属クラブでは同じセンターバックの松田直樹や中澤佑二、司令塔の中村俊輔らスタープレーヤーの陰に隠れ、スポットライトを浴びることはなかった。

移籍のオファーは頻繁に届いていただろう。他のクラブなら主役になっていたかもしれない。それでも栗原勇蔵は日産スタジアムの、ニッパツ三ツ沢球技場のピッチに立ち続けた。どんな想いでF・マリノスー筋を貫いてきたのか。

プロキャリア18年。横浜市瀬谷区出身で、ジュニアユース時代から数えるとF・マリノス所属歴は24年に及ぶ。クラブとともに歩み、惜しまれながら現役を退く〝レジェンド〟のサッカー人生を振り返ろう。

荘厳　経験から得た自信

栗原はいつも落ち着いている。ピッチの中でも外でもどっしりと構え、常に自信に満ち溢れているように見える。この堂々たる立ち居振る舞いはどうやって身につけたのか。

「自信は今でもない」と笑い飛ばす。「ヘディングの強さと体の強さには自信があったけど、本当にプロになれるとは思っていなかったから」。ジュニアユースには入ったものの、ユース昇格は「ギリギリだった」。小学生のときはFWで、ジュニアユースではサイドハーフでプレー。ユースではサイドバックやボランチなども経験し、「高1の終わりか高2のとき」に、当時ユースの監督だった安達亮（現カターレ富山監督）のもとでセンターバックにコンバートされた。

「サイドハーフにこだわりはなかった」からすんなり受け入れられた。「後ろから見える景色が新鮮で面白かったし、相手選手とぶつかり合って抑えるのも楽しかった」。そこからメキメキと頭角を現し、1つ上の世代から9人がトップチームに昇格したことでプロを目指す上での「物差しができた」。そしてU－18日本代表に招集されるなど実績を重ね、同期の榎本哲也（現カターレ富山）とともにトップチーム昇格を勝ち取った。「その当時は欧州クラブへの移籍はほとんどなかったし、Jリーガーになることがある意味ゴールだったから本当にうれしかった」

ようやくプロサッカー選手になれた。だが、すぐに試練が待ち受けていた。「上がったらそこにマツさん（松田）とボンバー（中澤）がいて。あまりにも差がありすぎて自信を失った」。上下関係が厳しく、チームに溶けこむことにも苦労した。「先輩の目を見てこわごわやっていたし、だから自信なんか全く持てなかった」

一つの目標を立てた。「C契約（Jリーグには A、B、Cの3つの選手契約があり、公式戦450分出場するとA契約を結べる）からはい上がって、（年俸の上限がない）A契約を結ぶ」。しかし、チームにはセンターバックが8人いて序列は最下位。基礎練習続きでふてくされる時期もあった。それでも、U－20日本代表でキャリアを重ね、プロ2年目の2003年4月23日、Jリーグヤマザキナビスコカップ（現Jリーグ YBCルヴァンカップ）のベガルタ仙台戦でようやく出番が訪れる。

プロデビューを飾ったその年はリーグ戦7試合に出場、チームはJリーグ制覇を成し遂げた。そこから徐々に出場機会を増やし、岡田武史監督体制4年目の2006シーズン、京都パープルサンガ（現京都サンガF.C.）との開幕戦でスタメンに起用され、以降レギュラーに定着する。

「若い頃は無駄に自信があったかもしれないけど、本当の自信はいろいろな経験をして身についていくものかなと。自分もそうだった」。栗原の不動心は、戦い続けて、ボールを蹴り続けて、奪い続けて得たものだ。どんな苦境に立たされても、経験に裏打ちされた自信と信念を持ってピッチに立つファイターは周囲に絶大な安心感を与える。

敬慕　偉大な2人の先輩

「最も影響を受けた選手は？」と問いかけると、F・マリノスサポーター納得の名前が挙がった。「マツさんと佑二さんかな」。「ボンバー」ではなく「佑二さん」と言った。

開幕スタメンに抜てきされたプロ5年目の2006シーズンは、左右の松田と中澤とともに3バックを形成した。「あの2人は絶対的な存在で、自分はまだまだ劣っていたけど、たぶん岡田（武史）さんが成長を見越して使ってくれた」。F・マリノスは開幕から4連勝を飾った。「自分の力じゃなかったけど、めちゃくちゃ強くて、このまま優勝できるんじゃないかと思った。でも（浦和）レッズにボコられて（1－3で敗北）……」。結局リーグ戦では9位に終わったが、「2人がいたことはすごく心強くて、いい感覚でプレーできた」

偉大な先輩の背中を追い、栗原はその年、日本代表に初招集された。「えっ、俺が？」とは思ったけど、舞い上がることはなかった」。デビューを飾った2006年8月9日のトリニダード・トバゴ戦では、F・マリノスでのプレー同様、物怖じせず果敢な守備を見せた。

松田、中澤とのプレーは、松田がクラブを退団した2010シーズンまで続いた。失点数を見ると、2006シーズンがリーグ3位の43失点、2007シーズンはリーグ2位の35失点、2008シーズンはリーグ3位の32失点、2009シーズンはリーグ3位の37失点、そして2010シーズンはリーグ5位の39失点。鉄壁の守備でチームを支えたが、しばらく優勝争いに絡めなかった（9位、7位、9位、10位、8位）。「充実はしていたけど、刺激のないシーズンを送っていた」。なかなか点が取れなかった。「原因が分かっていながら、何でできないんだろうというもどかしさがあった」

2010年4月には、2006年の初招集以来遠のいていた日本代表

に復帰。同年の南アフリカ・ワールドカップこそ招集を見送られたが、以降コンスタントにメンバー表に名を連ねることになる。

自身の成長に多大な影響を与えた2人には「すごく感謝している」。「この人たちに追いつけば、という想いでやってきた。マツさんの破天荒なところ、ボンバーのストイックなところにはやっぱり影響を受けた」。2人から学んだことは「全部じゃないけど、ほとんど」。6つ上の松田からは「一緒にプレーしていく中でいろいろなことを教えてもらった」。5つ上の中澤には「手のひらの上でずっと転がされていたけど、そのおかげで俺のサッカー人生ができあがった」

試練

届かなかった栄冠

「キャリアの中で一番〇〇だったことは?」。いくつか質問をぶつけたが、ほとんどは「多すぎて思い出せない」と返ってくる。「俺は人より感情が乏しいから。いろいろあったけどすぐ忘れちゃう」と屈託のない笑みを見せる。ただ一つ、この問いだけは明確に答えてくれた。「キャリアの中で一番悔しかったことは?」

「たくさんある。自分がやられて負けた試合はやっぱり悔しい。でもそういうことは都合良く忘れて、あまり憶えていない」。同じ流れかと思ったが、こう続けた。「でも、そんな自分でも忘れられないのが優勝を逃したとき。自分の中で一番デカい出来事だった」

F・マリノスは2011シーズンにリーグ戦5位に浮上。2012シーズンには4位につけ、タイトルへの機運が高まる中で2013シーズンを迎えた。開幕6連勝と上々のスタートを切り、以降も着実にポイントを重ねた。勝ち点4差で残り2試合というところまでこぎ着けた。誰もがF・マリノスの優勝を信じて疑わなかった。しかしそこからアルビレックス新潟、川崎フロンターレに連敗。2位につけていたサンフレッチェ広島にすんでのところで栄冠を持っていかれた。

同じセンターバックの松田(上)と中澤(下)から多くを学び、ともにF・マリノスの歴史を築いた

「もちろん自分も悔しかったけど、俊さん(中村俊輔)が地面をたたいて悔しがっているのを見て、改めて本当に悔しいことなんだと実感した」。その1カ月後、F・マリノスは21年ぶり7度目の天皇杯優勝を遂げた。栗原自身、主力メンバーとして初めて獲得したタイトルだったが、「想像していたよりもうれしくなかった。リーグ優勝を逃した後だったから『こんなものか』と。それぐらいあのときは悔しかった」

2013年は日本代表での活動もあって多忙だった。6月にFIFAコンフェデレーションズカップに出場、7月には東アジアカップで頂点に立った。キャリアにおける輝かしい時期だったが、本人は苦悩していた。「めちゃくちゃ大変だったし、代表にはもう行きたくなかった」

日本代表でレギュラーに定着することはなかった。「移動が大変だし、時差ボケになるし、そのうえ試合にも出られず達成感もない。代表に呼んでもらうことについてはずっと葛藤があった」。代表活動に参加してコンディションを崩すこともあり、クラブに貢献できず歯がゆさを感じた。「代表に呼ばれて、それをいい形でチームに還元できれば良かったけど、自分にはマイナスの影響が出ていた」。代表引退を宣言する選手の気持ちも理解できるようになった。「自分が当時そう言っていたら、『どの立場で言ってんだよ』、『どうせ呼ばれねえだろ』って批判されたと思うけど、試合に出ていないほうが精神的にキツいから」

栗原勇蔵 2002~2019

- 2002 トップチーム昇格
- 2003 J1リーグ優勝。①4月23日のヤマザキナビスコカップベガルタ仙台戦でプロデビュー。4月26日のジェフユナイテッド市原(現ジェフユナイテッド市原・千葉)戦でリーグ戦デビュー。ワールドユース(現U-20ワールドカップ)ベスト8進出
- 2004 J1リーグ優勝。②2月10日のACLビンディン戦でプロ初ゴールを記録
- 2005 ③8月20日のジュビロ磐田戦でJリーグ初ゴールを記録
- 2006 ④8月9日のトリニダード・トバゴ戦で日本代表デビュー
- 2011 ⑤6月26日のモンテディオ山形戦でクラブのJリーグ通算1000ゴール目を記録
- 2012 ⑥6月8日のヨルダン戦で日本代表初ゴールを記録
- 2013 天皇杯優勝。FIFAコンフェデレーションズカップ2013出場、EAFF東アジアカップ2013優勝
- 2016 ⑦6月11日の川崎フロンターレ戦でJ1リーグ通算300試合出場
- 2019 ⑧3月13日の湘南ベルマーレ戦でリーグ2位となるカップ戦通算83試合出場(85試合まで更新)

横浜F・マリノス通算	日本代表通算
446試合・23得点	20試合・3得点

年	年齢	横浜F・マリノス監督	背番号	J1リーグ成績		カップ戦成績		天皇杯成績		ACL成績	
2002年	19歳	ラザロニ→下條佳明	35	0試合	0得点	0試合	0得点	0試合	0得点	——	——
2003年	20歳	岡田武史	30	7試合	0得点	2試合	0得点	0試合	0得点	——	——
2004年	21歳	岡田武史	30	8試合	0得点	7試合	0得点	2試合	0得点	4試合	2得点
2005年	22歳	岡田武史	30	13試合	1得点	2試合	1得点	1試合	0得点	4試合	0得点
2006年	23歳	岡田武史→水沼貴史	30	30試合	1得点	8試合	0得点	3試合	0得点	——	——
2007年	24歳	早野宏史	30	25試合	0得点	8試合	0得点	1試合	0得点	——	——
2008年	25歳	桑原隆→木村浩吉	4	24試合	0得点	5試合	1得点	4試合	1得点	——	——
2009年	26歳	木村浩吉	7	26試合	3得点	10試合	0得点	2試合	0得点	——	——
2010年	27歳	木村和司	4	28試合	2得点	6試合	0得点	0試合	0得点	——	——
2011年	28歳	木村和司	4	30試合	3得点	2試合	1得点	3試合	0得点	——	——
2012年	29歳	樋口靖洋	4	31試合	0得点	3試合	0得点	3試合	0得点	——	——
2013年	30歳	樋口靖洋	4	31試合	2得点	6試合	0得点	6試合	1得点	——	——
2014年	31歳	樋口靖洋	4	29試合	3得点	1試合	0得点	2試合	0得点	4試合	0得点
2015年	32歳	モンバエルツ	4	11試合	0得点	2試合	0得点	0試合	0得点	——	——
2016年	33歳	モンバエルツ	4	12試合	1得点	9試合	0得点	2試合	0得点	——	——
2017年	34歳	モンバエルツ	4	8試合	0得点	6試合	0得点	2試合	0得点	——	——
2018年	35歳	ポステコグルー	4	3試合	0得点	4試合	0得点	1試合	0得点	——	——
2019年	36歳	ポステコグルー	4	0試合	0得点	4試合	0得点	1試合	0得点	——	——

❶プロデビュー

ベガルタ仙台とのプロデビュー戦(写真)はセンターバックで先発したんですけど全然ダメでした。緊張をとおり越してとにかくがむしゃらにプレーしたんですけど、いい試合ができなくて自分たちにがっかりしたのを憶えています。俺も含めて控えメンバーが結構出てて、試合後に岡田(武史)さんにボロクソ言われました(笑)。その直後にリーグ戦でもデビューしました。ジェフ市原(現ジェフユナイテッド市原・千葉)との試合で1-3で負けている状況で、FWで出してもらいました。この試合も緊張しなかったというか、緊張している場合じゃなかったですね。「やっと出られる」という気持ちが大きかったし、失うものはなかったので思いっきりプレーしました。ミリノビッチというセンターバックと、相手が鼻血を出すぐらい激しくやり合いました(笑)。

❷プロ初ゴール

確かヘディングで2点入れて、3-0で勝ったんですけど、正直相手がそこまで強くなかった。当時はACL(AFCチャンピオンズリーグ)の価値があまり高くなくて、A3(チャンピオンズカップ)のほうが賞金も高く、チームもそっちを優先していました。ACLにはレギュラー組が行かず、ある意味練習試合みたいな感覚だったからゴールを決めたときはめちゃくちゃうれしかったけど、その瞬間だけでしたね。ただチームが勝って雰囲気は良かったし、試合後に岡田さんから「ベトナムからオファーが来てるぞ」って冗談で言われたのはよく憶えています(笑)。
※写真は2004年5月5日のホームゲーム時のもの

❸Jリーグ初ゴール

相手チームのGKがマリノスに所属していた(川口)能活さんだったんですけど、セットプレーでファーに来たボールを、確かすねで押しこんだのを憶えています。初ゴールだったしうれしかったけど、チームが負けてしまったのでそこまで喜べなかったですね。

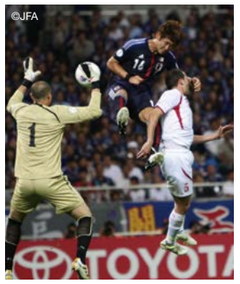
❹日本代表デビュー

初めて武者震いを経験しました。坪井(慶介)さんが負傷して後半途中(60分)で出たんですけど、「ヤバいな。日本代表として本当に試合に出るんだ」と。小さいころに見ていたカズ(三浦知良)さんや井原さんがいた世界に、そのピッチに自分が出られると思ったら武者震いしてきて。気持ちの余裕はなかったですけどミスを恐れずプレーしました。接触で相手選手をケガさせてしまいましたけど、いつもどおりのプレーはできたかなと。ただそれからしばらく代表には呼ばれませんでした(笑)。

❺クラブ通算1000ゴール

なぜあの場所にいたかは思い出せないんですけど、いい位置にいて金井(貢史)からパスが来てヘディングで決めました。決めればクラブ通算1000ゴールだというのは知ってましたけど、DFだしあまり意識はしていなかったです。でもその後に記念品などをもらって、すごく称えてもらえましたし、やっぱりFW、点を取る人はいいなと(笑)。リーグ最少失点に抑えても、個人が評価されることは少ないですからね。

❻日本代表初ゴール



(吉田)麻也が前半の終盤にケガをして、代わりにピッチに入りました。6-0の6点目だったんですけど、次の試合も自分が出るつもりで、1点でも入れて勢いをつけられればと思い、実際に決めることができました。ゴールの前のプレーで、(中村)憲剛さんからすごくいいボールが来てヘディングで合わせたけど決められず、もう1本ぐらいチャンスがあるかなと思ったところで長友(佑都)からいいクロスが入って今度は決めることができました。試合後に憲剛さんから「何で俺のときは決めねえんだよ」って怒られました(笑)。

❼Jリーグ通算300試合出場

今まで積み上げてきたものを評価されてうれしかったです。ただその頃はあまり試合に出られていなくて、セレモニーがあった試合(FC東京戦)もベンチでちょっと複雑な気持ちでした。でも長く一緒に戦ってきたシゲさん(松永成立/GKコーチ)からアツい言葉をかけられて、ちょっと泣きそうになって。がんばってきて良かったと思うと同時に、もっとがんばらないといけないなと、改めて気を引き締め直しました。

❽カップ戦クラブ最多出場

ルヴァン杯はリーグ戦とは異なり、若手にチャンスを与える場でもあるから、そう考えると下積みが長かったのかなと。ただこうやってクラブの最多記録を更新して85試合出られたことは、もちろんクラブがずっとJ1にいるからですけど、それなりにすごいのかなとも感じています。でも優勝はしていないんですよ。タイトルを取っていないと、ただ試合に出ていただけになるのでそこはちょっと微妙な気持ちですね(笑)。

とはいえ、「最も影響を受けた監督」にはアルベルト・ザッケローニの名を挙げた。「Jリーグに来たら必ず成功する」と確信するほどの指導力を備え、代表では多くのものを吸収することができた。ミランやラツィオをはじめ数々の強豪クラブを率いたザッケローニは2010年から2014年のブラジル・ワールドカップまで日本代表を指揮した。初陣となったアルゼンチン代表との親善試合には栗原も出場。1-0で歴史的な勝利を飾り、以降も定期的に招集されて、ともに戦った。

「すごく緻密で、相手を研究して、細かいところも徹底的に練習して。例えば、急にスローインの練習をしたときがあって、直後の試合でそれが狙いどおりにハマって点を取れたときはやっぱりすごい監督だなと」。

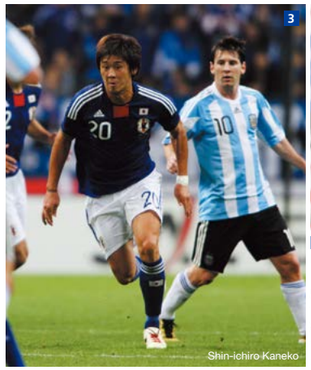
“戦術の国”イタリアの名将はピッチ外でも目を光らせていたという。「選手をよく見ていた。食事のときも選手の様子を見ていて、ある意味気が抜けなかった」。代表では難しい立場だったが、こうした経験は成長の糧になった。

不変

残留し続けた理由

2014年シーズンから徐々にプレー機会が減少した。今シーズンはリーグ戦で出られず、公式戦の出場は計5試合にとどまった。ゲームから遠のいていく状況をどう受け止めていたのか。

「10年近くずっと試合に出続けて、出るのが当たり前の生活を送ってき



Shin-ichiro Kaneko

J.LEAGUE

1 2013シーズンのラスト2試合で連敗を喫し、リーグタイトルを逃した 2 2014年1月1日、決勝で広島を2-0でくだし、21年ぶり7度目の天皇杯優勝を果たした 3 日本代表ではアルゼンチン代表のメッシ（右）らスター選手とも対戦した 4 ザッケローニ監督のもとで日本代表戦17試合に出場するも、ブラジルW杯では招集を見送られた

て、出られなくなったときは平常心を保つのが大変だった。何もかも失ったような感じで本当にキツかった」。気落ちするような言葉を口にするのは珍しい。それぐらいショックが大きかったのだろう。「朝起きたとき、『あっ、俺試合に出られないんだ』って。とにかくつらかった」

アカデミー上がりで長年トリコロールのユニフォームを背負ってきた選手でも、状況によってはクラブを離れる決断を下す。中村俊輔も榎本哲也も飯倉大樹もサポーターに惜しまれながら移籍した。栗原に同様のことが起こってもおかしくはなかった。若手のころから現在に至るまで多くのオファーが届いていたはずだ。「実際これまでJリーグだけじゃなくドイツ、ポルトガル、カタール、中国からもオファーをもらった。（エリク・モンバエルツ）前監督のもとで出場機会を失ったときもたくさんのチームが声をかけてくれたけど、全部断った」

一番可能性が高かったのは2012、2013年ころに、リーグ制覇を狙うJクラブから届いたオファーだったという。監督が会いに来て、今後の具体的なプランを説明してくれた。「本気で誘ってくれていると感じたし、この監督に教わったら選手としてもう一段階レベルアップできるんじゃないかと一瞬考えたけど、『俺はF・マリノスでプレーするんだ』と決めていたから行かなかった」

残留した理由は「ちょっとひねくれた言い方をすれば、めんどくさかったから」。栗原らしい表現だ。「他のクラブに行けば勉強できることは分かるけど、マリノスでもまだ学べることはあった。年俸が上がるかもしれないけど、お金はいつからかどうでもよくなってきた」

その考えの根底にあるのはクラブやサポーターへの想いだ。「F・マリノスがどんどん好きになっていった。サポーターもそう。試合に出られなくなってからはサポーターへの感謝の気持ちがより大きくなった。自分がつらい状況でも応援してくれて、ピッチに立てば大きな声援を送ってくれて」。そして照れ隠しか、ニヤリとしてこう付け加えた。「まあ移籍しなかったのは、俺の野心や向上心が他の選手より劣っていただけかもしれないけど」

愛念

育まれたチーム愛

2019年9月18日に36歳になった。「物心ついたのが4、5歳と考えると、13、4年と18年だからプロのほうが長く感じる。ただ振り返ると、あっという間だった」。少し間を置いて再び口を開く。「こんなに長くできるとは思わなかったし、長くいすぎちゃったかなとも思う」

J1にとどまり続けるF・マリノス一筋で、在籍年数は18年。プロクラブになってからは最長所属選手となった。リーグ戦300試合以上に出場し、カップ戦出場数はクラブ歴代1位、リーグ全体でも歴代2位の85試合に上る。気づけばクラブを代表するプレーヤーになったが、本人にはその実感がない。「俺はただ長くいるだけだから」

栗原は井原正巳ら〝堅守のマリノス〟を象徴する選手と比較されてきた。「ディフェンスでは井原さん、オムさん（小村徳男）、マツさん、ボンバーっていうすごい人たちがいて、実績では劣っている。そういうところでは勘違いしないというか、客観的に見られるので、自分がすごいとは思わないし、今でもあの人たちをリスペクトしている」。ここでフッと息を吐き、「ただ、そういうすごい人たちに在籍年数で勝ったのは自分の誇り」と笑顔を見せた。

中澤が2018シーズン限りで引退し、2019シーズンはチーム最年長選手としてプレーした。「ボンバーがいたから、ずっとベテラン扱いされなかった。やっぱり年齢でも1番と2番では大きな違いがあって、今まではそれほど重圧を感じなかった」。2019シーズンはそのプレッシャーにさらされた。「責任も感じたし、一番上に立っていろいろなことが見えてきた」。チームではどんな役割を担ったのか。「嫌なこともこなそうと心掛けた。試合には出ていなかったけど、クラブに貢献したい気持ちはあったから」

F・マリノス生え抜きの最年長選手として、後輩選手にどんなことを伝えたいか。「環境も時代も変わってきたから偉そうなことは言えない」と前置きして、こう続けた。「今は移籍が活発で、海外に行く選手も増えている。でも、ここにいる以上はF・マリノスを愛してくれって言いたい。F・マリノスを踏み台にするのではなく、クラブを愛して、クラブのためにやってほしい」

その流れで、思いきって聞いてみた。「横浜F・マリノスを愛している？」。少し間を置き、相好を崩してこう答えた。「そうじゃなかったらこんなに長くいない。24年いるし、愛しているという言葉が正しいかは分からないけど、自分にとっては家族みたいな大切な存在」

マリノス君のJ1通算450試合出場を祝う、2019年10月19日湘南戦での記念セレモニーにプレゼンターとして登場

奮励

クラブを一枚岩に

引退を発表する約2カ月前、「今後についてどう考えているのか」と聞いた。「基本的にはここでやることしか考えていない。ここでダメだったら辞める」。年齢的な衰えも感じ始めていた。「試合に出ていないのもあって、練習がキツく感じるし、心肺機能も足腰も弱くなっているし、目も悪くなってきた」

若手時代はよく遊びに行ったが、いつしか制限するようになった。「昔は平気だったけど、今はもうキツい。次の日のダメージがデカいし、そんな余裕はない」。そして「そんな感じだから余計に年をとったと感じるけど、それはもうしょうがない」と大口を開けて笑う。

現役を退くことに未練はないのか。引退を表明した後に問いかけた。「自分の中では精いっぱいやってきたつもりだし、限界だと感じた。悔いはない」。清々しく晴れやかな表情だった。出場機会を求めて他クラブに移籍することは考えなかったのか。「自分のモチベーションを上げるのも大変だし、そんな気は全く起きなかった」

今後もF・マリノスに籍を置くことを明言している。チームでは良き兄貴分であり、とても心強いが、どんな形でクラブと関わっていくのか。「ずっと選手だったから会社で何ができるか分からない。自分が一番力を発揮できるところはどこか。準備期間をもらってクラブと話し合いながら決めていきたい」。すでに考えていることはある。「どんな役割を与えられるかは分からないけど、クラブが一枚岩になる手助けができれば。昔に比べて会社とチーム、社員と選手の物理的な距離が遠くなった。マリノスタウンがあるときはいつも一緒だったけど、今は練習場とオフィスが離れているし、みんなで食事することもなくなった」

一抹の寂しさを感じているのかもしれない。「俺ですら、名前が分からない社員が多い。他のクラブは元選手が結構会社にいるけど、F・マリノスは不思議と少ない。お互いにいい仕事ができるように、そうしたコミュニケーションの部分は改善したいし、自分がつないでいくようなことができればいいなと」

絆

美しい関係は続く

栗原はF・マリノスのどこに魅力を感じ、クラブのために粉骨砕身してきたのか。「最近はネガティブな話が多いからな」と笑いを誘い、一度考えてこうつないだ。「いろいろな魅力があるけど、今はグローバル化を進めているところかな」

長年在籍してきたからクラブの変化が分かる。シティ・フットボール・グループとの提携によって様々なことが変わった。補強戦略、育成方針など世界のトップクラブから学び、採り入れ、人材交流を推し進める。「いい選手が来るようになったし、そこは今の一つの魅力なのかなと」

ただし、栗原が思う本質的な魅力は違うところにある。「結局俺にとっては横浜の街が一番。横浜よりいいところはない」。もちろん出身地であることも大きい。「生まれたところでもあるし、移籍してきた選手はみんな『いい街だ』と言ってくれる。他の国、他の街に行ってみたい気持ちがなかったわけじゃないけど、日本よりいい国はないし、飯もうまい。だから出たいと思わなかった」

横浜の街を愛し、F・マリノス一筋のキャリアを歩んだ。サポーターへの感謝を胸に秘め、クラブにその身を捧げた。F・マリノスを愛する人々はその姿に心を打たれ、称え、憧れ、拍手を送った。できすぎたストーリーだが、積み重ねてできあがったものだからケチのつけようがない。この美しい関係はこれからも続く。

Shin-ichiro Kaneko

DF 4 | 栗原勇蔵（くりはら・ゆうぞう）
1983年9月18日生まれ、神奈川県横浜市出身。鋼鉄の肉体を武器に、対人や空中戦で無類の強さを見せるセンターバック。横浜F・マリノスのアカデミーで育ち、2002年のトップチーム昇格から2019シーズンまでトリコロール一筋を貫いた。今シーズン、ルヴァン杯におけるクラブ最多出場記録を更新、リーグ歴代2位の85試合まで伸ばした。

1/3 AD
55 mm × 247 mm